

描かなかった夕焼け

草間 小鳥子

架空の画集を買いたいという人が現れるなんて、夢にも思わなかった。

右手で葵の手を握り、左手に通勤鞆と買い物袋をぶら下げ、スーパー脇の坂道を登り切った時、目の前に広がった夕焼けを「あ、描きたい」と純は思う。だけど、葵は手を強く握り返してくるし、買い物袋はちぎれそうなほど重たくて、純には絵筆を握る手など、もう残されていなかった。

てんてこ舞いで夕飯を支度し葵をベッドへ放り込み、夜更けにようやく布団へ入ると、純の瞼の裏に「描けなかった絵」がぼんやりと浮かぶ。今日の夕焼けも、昨日の会社の渡り廊下から見た飛行船も、葵がはじめて足を浸したビニールプールで揺れた水紋も、いつか描こうと誓った星空も――。描きたいと思うのに、時間がない。いや、時間など作ればいいのだし、本当に描きたい人はきっと寝る間も惜しんで描くのだろう。疲れ切った純の瞼の裏で「描けなかった絵」がまた一枚、空想のスケッチブックへさし挟まれ、「このまま架空の画集が出来上がりそう」とまどろむ意識の片隅で、純は自嘲気味にふっと息を漏らした。

だからその日、会社の自動販売機の前に立った時、「絵を買いたい」と声を掛けてきた男を、詐欺師か何かかと純は思った。

「言い値で買いますよう」

純は首を振った。

「『描けなかった絵』を？ ばかみたい」

すると男は、一歩前に出た。一歩前に出たところで、そこはかとなく印象の薄い男で、ふと目をそらすとたちまち顔を忘れてしまいそうな希薄さがあった。

「『描けなかった絵』じゃない、『これから描く絵』でしょう。まとめて買い上げたい。正直に申し上げると、あなたの才能に高値がつかましてもね。青田買ってやつです」

男は胸ポケットから小切手を振り出し、

「才あるところに業と欲が生まれる。我々はその代償と価値をよく知っている――実に魅力的な魂の取引だ」

そう呟いた端から、雲を掴むように言葉は消えてしまう。純は眉をひそめた。

「才能？ まだ何も描いていないのにな」

「ええ。一流の画商ともなると、絵が描かれる前に、その素晴らしさがわかるものです」

悪い気はしないがばかみたいいな話だし、どこにでもある黒いスーツをまとった目の前の男は、どう見ても画商などではなさそうだった。純はため息をつき、「じゃあ、十円」と答える。

「娘が学童に行きたがらないから家で留守番させてるの。毎日午後四時に電話するからって約束してて。十円あれば公衆電話でひと話せるでしょ。ちょうど小銭を切らしてたの」

純が片手を差し出すと、男は頭を抱えた。

「言い値で買うというのに、たったの十円ですとー!? 間もなく、電話をかけるのに小銭などいらなくなるっていうのに……」

「どういうこと?」

「とにかくあんた、魂を安売りしすぎだ」

「じゃあいいい、あなたには売りません」

純がむっとして言うと、しぶしぶ男は了承した。ところが、支払いは絵が完成してからだという。

「結局、今は何の役にも立たないじゃない」

純は自動販売機へ千円札を滑り込ませ、薄っぺらな男の薄っぺらい小切手にサインをした。

「この先、あなたに取引を持ち掛けてくる輩が何人も現れるでしょう。どんなに高値を言われようとも、いいですか。私との契約を忘れないでくださいよ。『もう売りました』とだけ言うんです」

契約と言われても、と純が睨みつけた先いつの間にか男の姿はなく、崩した十円玉を隅の公衆電話へ入れて番号を押すと、ワンコールで葵が出た。

——手を洗った? おやつは足りた? 宿題もね。20時過ぎには帰るから。うん、うん、愛してる。

月日はあっという間に流れる。

凍てついた道を、純は駆けていた。発売されたばかりでまだ高かったけれど、いつでも葵と連絡がとれるなら、と思いついて買った携帯電話に中学校から連絡があったのは、雪が降り始める少し前だった。葵が下校中に転倒し、腕の骨を折ったという。

「保険証はお持ちですか?」

病院の受付で聞かれ、純は胸に抱きかかえたポーチをひっくり返し、葵の保険証を差し出す。

「医療証は?」

ふたたび純がポーチをがさごそやっている、畳みかけるように聞かれた。

「絵を売りませんか?」

はっとして純は顔を上げたが、制服姿にマスクをした事務員は表情一つ変えずに続ける。「あなたが『描くかもしれない絵』、高値で買います」

とっさのことに慌てて首を振りながら、「もう売りました」と答え病院の廊下を駆け出した純を、事務員は追ってこなかった。

しょぼくれた葵の手を引く帰り道、うっすらと雪に覆われた公園に目を奪われ、純は立ち止まった。耳元で架空の画集の頁が繰られる音がし、純は手を伸ばしかけるが、「晩ご飯の支度、手伝えなくなっちゃってごめん」と呟いた葵の頭に、その冷たい手は下ろされた。

またある時は、転職活動の面接中、志望動機を尋ねた面接官が、
「絵を売る気にはなりませんか？」

と純に尋ねる。紙にペンを走らせながら、

「生活に困らないだけの金額を、すぐにご用意しましょう」

淡々と話す面接官の眼鏡の奥の表情は読めなかった。

「もう売りました」

おそるおそる純が答えると、面接官は何事もなかったように、希望年収の質問へと移っていった。

だから、少しでも気になっていた相手と二度目のお茶をして、互いに趣味や休日の過ごし方など会話を交わした後、

「ねえ、絵を売ってくれない？」

と優しく尋ねられても、純はため息とともにいつもの言葉を吐き出した。

「もう売ったの」

ところが、相手は食い下がった。

「いつ？ 誰に、いくらで？」

そういえば私は、一体誰とこんな契約をして、こんなやり取りを繰り返しているんだろう。純が答えあぐねていると、

「君はまさか、自分の魂を簡単に売り渡してしまったのかい？ 僕が買い戻してあげようか」
両手を握られ、しかし喫茶店の時計が午後四時を打つ音が響くと、純は立ち上がった。

「悪いけど、娘に電話をする時間だから」

店の外に出てスマートフォンを耳にあてるが葵は出ず、留守番電話サービスの音声がかかった。
「仕事、忙しそうね。ご飯ちゃんと食べてる？ 返事はいいから。自分を大事に、幸せにね。愛してる。」

純が店内に戻ると、空っぽの席に冷めた紅茶が残されていた。

年月はあっという間に流れる。

窓際の籐椅子に腰かけた純は、そういえば、こんなふうに腰を下ろすのはいつぶりだっただろう、と思う。息つく間もなく走り回ってばかりだった。膝の上に目を落とし、手の甲に刻まれた皺をそっと撫でる。グループホームへの入居に付き添ってくれた葵は、今しがた帰った。いや、葵は今日は仕事だったはず。じゃあ、さっきのは孫の華ちゃんだったかしら。

「ようやく描けそうですか、純さん」

声を掛けられ振り返ったものの、いやに薄っぺらい男の顔に純は見覚えがない。

「新しいヘルパーさん？」

男は答えず、窓にかかったレースカーテンをさあっと引いた。純の瞳いっぱい夕焼けが映し出され、ああ、と息が漏れた。「私、この夕焼けを知ってる」

窓辺の陰に立つ男は、

「年月は、思い出を美しくする」

誰にともなく呟くと、純の手に絵筆を握らせた。

「あなたはこれから素晴らしい絵を描き、そして評価される。さあ、描くことに没頭するんです。何もかも忘れて」

男の声はしかし、ちょうど鳴り響いたプッシュホンの時報にかき消されてしまう。

「失礼、娘に電話を」

絵筆を受話器に持ち替え、電話機に貼った葵のスマートフォン番号をゆっくりと押す丸まった背中を見つめながら、男は薄い肩をすくめるのだった。

葵が純の部屋へ足を踏み入れると、窓から差し込む西日が、主のいない籐椅子を優しく濡らしていた。椅子の上に残されたスケッチブックは、純が最後まで膝の上に乗せていたものだと聞いており、そっとめくってみる。ほとんどが白紙だったが、見事な夕焼けの絵に、葵の手が止まる。

淡雪に覆われた公園、真っ青な空に白く浮かぶ飛行船、ゆらゆら光を跳ね返す水面に、息をのむような星空――。

頁を繰りながら、「お母さん、絵を描くのが好きだったのかな」と葵は思う。でも、どんなに思い出そうとしても、記憶の中に母親が絵を描いていた姿はなく、問いかけようにも、できない。今朝のうちに、純はずっと遠くへ行ってしまったから。傍らには洗われた絵筆の、まだ濡れた毛先に水滴が光っていた。

葵は爪先へ目を落とし、純から欠かさず掛かってきた電話のことを思う。雨の日も風の日も、必ず午後四時に鳴り響いた電話機へ駆け寄った時の安心感を。そして、自分ほれだけ母のことをわかっていたのだろう、とも。私の存在が、母の才能を潰し夢を奪っていたのではないか――。葵は袖で涙を拭う。もう一度だけ、母の声を聞きたかった。「愛してる」と、たった一言でいいから。

「いい絵でしょう？」

声を掛けられ振り返ったものの、いやに薄っぺらい男の顔に葵は見覚えがない。どこにもある黒いスーツ姿で、葬儀社の方だろうと葵は当たりをつけた。男は葵の手の中のスケッチブックを見やり、

「才があるほど、欲も業も深くなる。その才を活かし現世で評価されることこそが幸福だと考えていたが――私の勘違いだったようだ。誰も彼女の魂を奪うことはできなかった。残念です」

独り言のように呟いた端から、言葉は西日に溶けてしまう。だから葵は、目を瞬かせることしかできなかった。

「今朝、純さんが、おっしゃっていましたよ。『天国にも絵筆はあるかしら。それから、公衆電話も』って。そう、十円玉を握りしめてね……」

突如、鳴り響いたプッシュホンの時報が午後四時を告げる。
葵のスマートフォンが震えたのは、その時だった。